要性を強く感ずる。一般に死直前まで欲求が多く、比較的明るい日常生活を送っているが、これは重篤な状態にも何度か陥りそれを切り抜けているためか、また疾患に対する知識が充分でないためなのか死に関する言動が少ない。しかし、これは看護記録からのものであり他部門と共に検討しなければならない。今回、死亡前1年の変化をまとめただけに終ったが、1年以前に出現する徴候も多いことから今後尚検討を要する。

記録からとらえることは第三者的視点でしかないが、このことから現状に置かれているＰＭＤ児により良い援助が与えられるよう考えてゆきたいと思う。

ＰＭＤ患者の各ステージにおける最も安楽な体位の研究

国立療養所西多賀病院
天　野　勝　子　　郷　内　カツエ

今回は夜間就寝時の安楽な体位についてまとめた。ＰＭＤ患者（児）に対する体位交換の実際を考えてみると、彼らに問いかけながら、要求に応じて納得のいくまで行うといった受動的な援助であった。こうした援助は、かなりの時間を要することもあり、睡眠というかけがえのない休息を妨げるのみならず、不安と焦燥を招く結果ともなっていた。「こうすれば楽である」という能動的な確信ある援助ができないものかと考えさせられていた。

ＰＭＤ患児39名に対して彼ら自ら自然に習得している合理的、かつ安楽にもつながっていると思われる就寝時の姿勢を2時間ごとに体動の如何にかかわらず調査した。体動困難な者には2時間ごとに体位変換を行っているが希望により随時行うことも多く、その希望時の原因も調べた。

障害度6以上になると体位変換を希望するようになる。障害度6～7が限界である。また体重が多いほど、拘縮が著しいほど自力の体動が困難になっていく。体位変換を必要とする患児の一般的な共通する体位は側臥位で両上肢をそろえ膝関節をやや屈曲し、両下肢、両足部を重ねている。脊柱の変形が目立っている者は、躯幹が完全な側臥位とはなれないでやや仰臥位となっている。側臥位とすれば仰臥位になるのは容易であるが、仰臥位から側臥位になるのは困難である。

自力体動の限界にある障害度6～7にみられる体位は仰臥位となり膝部を立てている。こうした状態では屈曲よりも伸展が可能であり、下肢が開排位となり易く苦痛を招くこともあるので注意する必要がある。枕の使用についてみると慣れの現象が大きく影響しているが、必ず枕を使用している者は、すべて体位交換が必要であり、枕を使用しない者に体動可能な者が多い。枕使用

の際は頭部を枕の中央よりも端に移動している。以上をまとめると次のようになる。

① 不安定を利用して運動している。（安定した平衡状態においては位置の変化も運動もおこらない）。そのためには、㋑支持基底面の広さが狭いこと。㋺重心が支持基底面の外にあること。㋩重心の高さが高いこと。㋥身体への加重が小さく、摩擦が小さい。人体の構造から仰臥位よりも側臥位のほうが㋑、㋩の条件にかなう。仰臥位と側臥位の中間位とすれば㋺のようになる。枕と頭部とが密着するよりは枕が柔らかすぎずに、また枕の中央よりも枕の端の部分に頭部を置くほうが、さらに水平面と頭部の接する面積を考えれば枕を使用しないほうが㋑となる。両足部を並べるよりも重ねるほうが㋩となる。掛け物を軽くしたり、床面をなめらかにすれば㋥の条件にかなう。

② 屈筋力が伸筋力よりも大きい。（ROM、ADL、などの測定によってもわかった。）側臥位で下肢を十分伸展しておけば、屈曲している状態よりも、より可動域が広くなる。しかし、仰臥位で膝部を立てた状態では、重力、摩擦力などの影響も大きく下肢は伸展のほうが容易である。

PMD患児の残存能力を最大限に発揮させることで微少な体動を可能とし安楽へもつながっていく。どんなに安楽な体位でも時間とともに苦痛へと変っていくが①、②の条件をととのえれば同一状態を免れる。各障害度ごとの安楽な体位については個人差もあり、今回はつかみ得なかった。

12、オシボリの清潔性と利用について

国立療養所再春荘
藤岡美代子　宗朋子
佐々木弘子　中原潤子
田中嘉子

〔はじめに〕

筋ジス病棟においても、感染防止は、重要な看護の１つである。この中で手指の清潔を保つ目的で、オシボリが、使用されているが、当病棟でも、排泄後、食事、オヤツの前後、その他に使用するため、お膳、オーバーテーブル、トイレなどに、オシボリを置き使用している。このオシボリは、各自夫々が、適当と思われる濃度のハリアミン液にオシボリをつけてすぐに巻いていた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

今回は夜間就寝時の安楽な体位についてまとめた。PMD 患者(児)に対する体位交換の実際を考えてみると、彼らに問いかけながら、要求に応じて納得のいくまで行うといった受動的な援助であった。こうした援助は、かなりの時間を要することもあり、睡眠というかけがえのない休息を妨げるのみならず、不安と焦燥を招く結果ともなっていた。「こうすれば楽である」という能動的な確信ある援助ができないものかと考えさせられていた。